

祝・ラグビーW杯成功!

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役 土田 浩

1 か月半に及んだラグビーワールドカップ2019日本大会が、大変な盛り上がりを見せて成功裏に幕を閉じた。

予想以上に盛り上がったのは、言うまでもなく、日本代表チームの大健闘のおかげである。世界の強豪アイルランド、スコットランドに快勝して、目標に掲げたベスト8＝決勝トーナメント進出を果たした。

私も「にわかファン」となって、日本代表の全5試合を実況中継で観戦した。「オフロードパス」、「ジャッカル」という用語も今回初めて知った。予選リーグ突破を懸けたスコットランド戦は、都内のパブリックビューイング会場で、大勢のファンに混じって「ニッポン、チャチャチャ」と大声を出して楽しんできた。この試合の4トライは、どれもドラマチックな美しいプレーだった。日本ラグビー史に刻まれる名場面として、未永く語り継がれることだろう。

熊谷ラグビー場でも、予選リーグ3試合が開催された。ロシア対サモア戦を観に行った友人は、駅や道で笑顔でハイタッチする地元ボランティアの歓迎に感動したと話していた。うちわ祭の山車や半被を羽織っての記念撮影は、外国人客に格好のSNSネタとなった。W杯直前の対南アフリカ・テストマッチでの気付きを活かして送迎バス路線を見直すなど、きめ細かな会場運営も好評だったと聞いた。

今回のW杯、ホスト国日本に対する来日外国人からの評判は、総じてすこぶる良かったようだ。中でも来日客を感激させたのは、出場国の国歌を、日本の観客が歌ったことだった。選手も観客も、遠い異国の地で自国国歌の大合唱に包まれ、さぞ心を高ぶらせたことだろう。ラグビーの観戦に限らず、グルメや観光でも日本を堪能した外国人からは、「安全」とともに、「親切」という感想が数多く寄せられたそうだ。日本人も、言葉の壁を越えて、おもてなしの気持ちを

自然に行動に表わすことに慣れてきた、と言えるのではないだろうか。

大会期間中に、猛烈な台風の襲来という困難に見舞われたが、事前の周到な準備・周知と的確な実施判断にも、さすがは日本と感じられた。スコットランドラグビー協会CEOによる試合中止の場合の法的措置発言は非常に不快であったが、日本の組織委員会以下関係者は、最大限の態勢を敷いて試合実施に向けて全精力を注いでいたのである。日本チームの試合が中止になると、収入面で痛手が大きいという事情も背景にあったようだ。

今回のW杯日本開催の成功は、様々な形で今後への期待を膨らませてくれた。

日本のラグビー人気は、4年に一度だけのものになることはなさそうだ。

熊谷には、強豪パナソニック・ワイルドナイツが本拠地を移転する。来年1月から始まるトップリーグでは、7試合が熊谷ラグビー場で開催される。ウィングの福岡、フォワード第一列の稲垣、堀江ら日本代表のヒーローたちのプレーをこれからは身近で見られる訳だ。熊谷に通う熱烈なファン層が広がることを期待したい。

来日した選手・観客・ジャーナリストらが発信した“ニッポン＝スバラシイ!”、“ニッポン＝オモシロイ!”の評判は、長期滞在型のインバウンド観光客の増大に繋がるに違いない。来年の東京オリンピック・パラリンピックを一層盛り上げるだけでなく、その後も長きに亘って、日本各地の賑わいにしっかりと寄与する筈だ。

海外の人々に多くの感動を与えた日本という国。まだまだ世界にアピールできることがたくさんありそうな、明るい希望がよみがえってきた。

